

VOICE OF LIFE

[ボイス・オブ・ライフ]

04

2022 AUTUMN

Take Free

世界に目を向け、未来を見つめる。

戦時下を生きる マイノリティの声

ウクライナ・周辺国 現地取材から



Dialogue for People

ムカチェボの小高い丘にある
バラノック城からの風景。

取材／安田菜津紀・佐藤慧

数世紀にわたり 差別を受けてきた ロマの人々

ウクライナ西部の街、リビウから寝台列車に揺られること4時間。緑豊かな山々を抜ける列車の車窓から、ときおり透き通った小川が見え隠れする。国立自然公園を横切りたどり着いたのは、石造りの家々が歴史を感じさせるザカルパツチャ州、ムカチェボ駅だ。「カルパツチャ山脈の向こう」という意味のザカルパツチャ州は、チェコスロバキア領だった時代を除けば、中世から20世紀半ばまでハンガリーの領土に組み込まれていたため、ハンガリー系の住民たちも多く暮らしている。

2022年2月より本格的に激化したロシアの軍事侵攻によって、多くの人が、比較的安全な地域だと認識されているザカルパツチャ州を目指した。ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニアの4カ国の国境に接し、常に人々の往来が続いているため、避難者の人数は流動的ではあるものの、人口集中による家賃の高騰や仕事

い子どもたちを連れてくるのに……」

「差別の空気」に 敏感に向き 合っていく

「ロマに対する差別がなくならない背景には、ロマ以外の人々に対する歴史教育も大きく影響していると思います」

そう語るヨアンナ・タレヴィッチ氏は、ウクライナの隣国ポーランドで大学の教壇に立ち、自身もまたロマのルーツを持つ。ロマの人々への差別は、ウクライナ国内だけの問題ではなく、ヨーロッパ各国で根深い問題だという。ヨアンナ氏は、主にロマの人々に対する差別や社会格差といった問題を改善するために、研究や教育・啓蒙活動を行っている。

「現在ポーランドの公教育の教科書では、ロマの人々がいかにヨーロッパで差別・迫害されてきたかということがほとんど書かれていません。特にナチスによるホロコーストでは、『ロマである』という、ただそれだけの理由で数えきれないほどの人々が命を奪わ

不足が深刻化している。とりわけそのしわ寄せを受けているのは、マイノリティの人々だ。

少数民族ロマは、数百年という歴史の中で、ヨーロッパ各地を移動する生活を続け、その土地土地で差別や迫害の対象となってきた

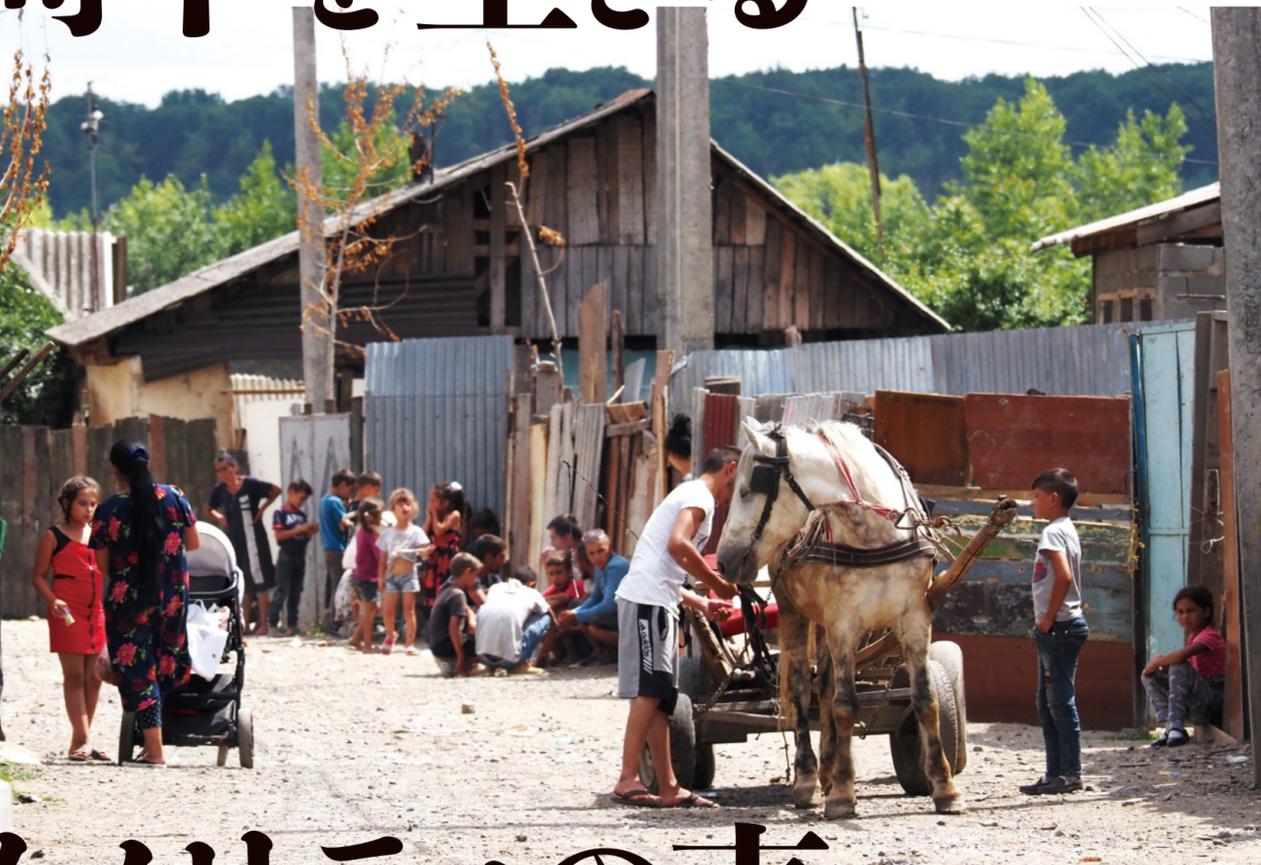
た。ナチスドイツのホロコースト

の対象にもなっており、ヨーロッパ全体でその総人口の25%〜70%が殺されたとみられている。犠牲者数の幅の広さは、その検証・調査の乏しさの現れでもあり、同じくホロコーストの犠牲となったユダヤ人と比べても、戦後補償や権利

回復など、十分に行われているとは言いがたいのが現状だ。

近年、混血や定住化、生活の多様化も進んでおり、ウクライナ国内には40万人ほどのロマの人々が暮らしているという。2010年ごろから、国際人道支援団体などが

戦時下を生きる



マイノリティの声

[右]ロマの人々が暮らすムカチェボのコミュニティ。[左上]左奥から、アレクセイさん、スウェタさん、孫のローラさん。[左下]支援活動の合間にインタビューに応じてくれたヨアンナ・タレヴィッチ氏。

ウクライナ・周辺国
現地取材から

VOICE OF LIFE

法的支援に力を入れ、身分証の取得も進んできたが、推計で3万人ほどがバスボートなど身分を証明できる書類を持ち合わせていないことが指摘されている。

現在もロマへの差別が解消されただけではない。とりわけ2018年には、ウクライナ国内で、ロマの集住地区への放火や襲撃など、犠牲者を伴う残忍なヘイトクライムが相次いだ。警察の捜査が十分尽くされたとは言えない。

こうした差別は、戦時下でもあらわとなった。戦地となった東部から避難してきたというスウェタさんは、息子と、その2人の子どもたちと共にこの地へと逃れてきた。子どもたちの母親は、戦禍で命を落としたという。

「駅に避難しているときに暖を取ろうとヒーターのある部屋に行ったら、『ロマの人たちは受け入れられない』と追い払われたんです」とスウェタさんは語る。

「入ることのできた避難所もあったのですが、私たちが入った後に、ヒーターのスイッチを切られてしまいました。私たちに、早く出て行ってほしかったのでしょ。幼

解しようとする姿勢が大切です。どれだけ国境を強固に閉じたところで、すでに社会はこんなにも多様なのですから」

過去の歴史とどう向き合うか、多様なバックグラウンドを持つ人々とどう理解を深めていくか、そして、一人ひとりがどのような社会を望み、声をあげていくのか……。それはポーランドやウクライナといった、どこか局所的な課題ではなく、現代社会が全世界的に抱えている問題のひとつであり、誰しにも関係のあることではないだろうか。国籍や出自、肌や目の色で命の線引きをするという状況は、残念ながら日本社会にも存在する。人の尊厳とは何か、改めて考えると共に、社会の中に漂う「差別の空気」に、敏感に向き合っていく必要があるだろう。

れていながら、そうした記述は非常に限られています」

そうした背景と共に、マイノリティへの差別は、往々にして政権の都合のよい道具として使われているということにも、ヨアンナ氏は警鐘を鳴らす。

争から逃れてきた100万人以上の人々が、海を渡りヨーロッパを目指した。その混乱は「欧州難民危機」と呼ばれることもあるが、「そうした『異質』な人々の流入こそが、国内問題の諸悪の根源である」というスタンスで支持を伸ばした政党も少なくない。

とってはとても重要なものなのでしよう。けれども、国を愛する」とは、他者の尊厳を理解しようとしていないということではありません。私たちはそれぞれに違った経験・文化・宗教を持っています。同じ人間なんて存在しないのです。その「違い」を理解し、リスベクトする必要があるのでしょ。『違うから』と排除するのではなく、まずは理

取材



安田菜津紀

中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。



佐藤慧

アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。

COLUMN

少しずつ前進する社会

「もしかすると今年は、パートナーと参加する初めてのパレードになるかもしれませんが。ウクライナでもプライドパレードはありましたが、参加したことはありませんでした。反対する人々が石を投げたり、暴力的に妨害することがあったからです」

そう語るスタニスワヴさんは、ポーランドの首都ワルシャワで学ぶ大学生だ。出身は激しい攻撃に見舞われたウクライナ北東部ハルキウ州で、家族はすでにウクライナ国内西部に逃れている。5年前から付き合っているパートナーは、2014年から戦闘が続く東部ドネツク州の出身だという。

「故郷はロシアとも近い小さな街で、とりわけ上の世代には、キーウなどの都会と違ってオープンな人が少なかったように思います。ポーランドは性的マイノリティに対する差別が非常に強いと聞いていたので、来る前には不安がありましたが、ワルシャワは安全で開放的だと感じます」

根深く残る差別、偏見に変化をもたらすことは、決して容易ではない。それでも、世界を見渡せば、婚姻の平等が次々と各国で実現されており、社会が前進していることをスタニスワヴさんは感じているという。後日スタニスワヴさんは、初めてパートナーと一緒に参加した、ワルシャワ・プライドパレードの写真を送ってくれた。



[上] 社会の変化を少しずつでも実感しているというスタニスワヴさん。
[下] ワルシャワ・プライドパレードには、戦時下のウクライナからも人々が合流した。

BOOK OF LIFE



学ぶことから
社会を変える!



アンチレイシストになろう! 人種差別をしない・させないための 20のレッスン

著: ティファニー・ジュエル
DU BOOKS

レイシズムとはいったいどんなもので、どのような構造的問題や歴史をもっているのでしょうか。それを止めるため、私たちにできることは? そんな疑問に対し、身近な例に引き寄せ、立ち止まって考えるためのページも設けながら、丁寧に紐解いていった1冊がこちらです。著者の父は黒人、母は白人、自身はバイレシャルだといいます。そんな彼女の呼びかけの中でとりわけ印象に残ったのが、「あなたの特権を使おう」というメッセージです。《私が支配的文化に距離が近いアイデンティティを持っているということは、私にそれ自体を無効にするパワーがあるということです》差別の問題は、支配的に抑圧する「マジョリティ」の問題です。だからこそ、そうした特権に自覚的であることは、変化をもたらすために大切な視点となるでしょう。「自分は救世主である、またはこれを慈善事業だと思いついた罠に陥らないように」という前置きも、重要な指摘です。



日本にレイシズムがある ことを知っていますか?

人種・民族・出自差別を
なくすために私たちができること

著: 原由利子
合同出版

ときおり、「日本に人種差別なんか無い」「あったとしても、そんなに大きな問題になるほどではない」というような声を耳にします。果たしてそれは本当でしょうか。帝国主義を掲げ、近隣の先住民を同化し、台湾・朝鮮などを植民地支配していく過程でつくられてきた日本のレイシズムの構造や歴史を知ると、人種差別が「ない」のではなく、「見えていなかった」「見えにくかった」だけなのだ気づくでしょう。各ページに配された説明・注釈のおかげで、本書一冊で、人種や民族、出自による差別について包括的に学ぶことができます。また、巻末に収録されている参考情報は、次のステップへと学びを深めるための地図でもあります。誰もが、様々なグラデーションの中でマジョリティ性、マイノリティ性を持っていますが、自身の中にあるマジョリティ性に気付くことが、社会全体でレイシズムについて考えていくための一歩になるのではないのでしょうか。

編集後記

船橋 和花 / D4P広報部



この夏、D4Pの小さな事務所に壁一面の本棚をDIYしました。知人から廃材を譲り受けて作ったため、パズルのようにパーツを組み合わせた作業。真夏の暑さに意識が遠のきながらもなんとか完成しました!(あれ、この棚ちょっと曲がってるかも...)と心の中で思いながらも、本を入れてみるとなかなかの達成感です。皆さんも本棚の整理をしてみませんか? 不要になった書籍は「チャリボン」でD4Pに寄付できます。それではすてきな読書時間を!



Dialogue for People



認定NPO法人Dialogue for People (ダイアローグフォーピープル/D4P)

国内外さまざまな地域で社会課題の渦中にある人々取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

VOICE OF LIFE バックナンバーもWEBで見られます!

d4p

検索

<https://d4p.world>



毎週水曜YouTubeラジオ配信中!



安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索!

d4p

検索

